

へ押し込んでしまふ事があります。それで子供が鼻や耳の中へ物を入れた時は固く禁じて子供自身にも指を入れさせぬやうに注意しなくてはなりません。

今一つ幼稚園の先生が、口にくはへて子供に見せぬやうにしておもらひしたいと思ひます。子供は直に先生のまねをしたがるものですからよく氣を付けていたゞかねばなりません、親のまねをして揚子をつかつて咽喉へ揚子が折れ込んで大

變に困つた例を私は知つて居ります。

それから幼稚園や小學校では昇汞水位は用意しておいて、子供が一寸した怪我をした時には脱脂綿に浸してつけてやるやうにしておらひしたいものです、硼酸水位では役に立たないから千倍の昇汞水を一単位は備へつけておいていたゞきたいと思ひます。アルコールやヨヂウムチンキなどもよいのですが、之等は痛くて子供が閉口しますから。(文責記者)

## 話の起源

K、 T 生

近世の教育の進歩は倫理的若しくは純智的の方面に於てよりは寧ろ審美的の方面に於て急速な變化を遂げて居るといふことには誰しも異論がないことと思ふ。往昔の教育は強き倫理的理想及び訓

練等に於ては却々力瘤を入れてゐたのでこの點に於ては今日の教育に優るものがあつたかも知れぬ。しかし乍ら一方今日の教育は却々進んで居る——少くとも大なる變化を経て居るのである、今

日の教育は以前の教育に較べて遙かに審美的になり、愉快な分子が多くなつて居る。

往昔の學校に於ては審美的感情に訴ふるものとは唱歌と行進と共同働作位のものであつた、けれども今日の學校には多くの愉快がある、殊に審美的感情は豊かになつて居る、多くの自由遊戯がある、藝術がある、音楽がある、舞踏がある、純藝術的なる諸種の要素がある、其他美の感覺に訴ふる多くの活動がある、吾人は學校を美なりと信ずることが出来るのである。裝飾、外觀等も價值として認容せらるゝ場合が昔よりも多くなつて來た。

兒童の喜ばしきもの、美しきものに對する愉快は實に非常なものである、而して吾人は未だ之を十分に統御し發達させる域には達して居ない、眞の教育は適當な感化によつて兒童が影響される時行はるゝものであつて、その効果は訓練や暗誦の時間によつてなさるゝ者よりも遙かに大である。

面白い話を子供等に聞かせてやつたときほど強い感情と興味の方が明瞭に感ぜらるゝことは尠からう。誰でも子供に話をしたところのある人は圖らずも偶然の機會によつて子供の内心に觸れ得たやうな不思議な満足を感じたであらう——その時子供は話が終るまで息も吐かずに聴き惚れて居るのである、談話者は話し終つて始めて夢より覺めたる如く思ふ、而して子供の心に永久の持物となるべき何物かを與へ得た如く感ずるのである。斯る經驗は催眠現象、宗教的愉快、若しくは審美的專念を喚起せしむるのである、斯る状態は談話を如何に有効ならしむべきかを理解するためばかりでなく全教育に如何に影響を及ぼすべきかを理解するために研究する價值が存するのである。吾人は如何なる話が子供を喜ばすべきかを研究して教授に際して常に之を應用することを心掛けねばならぬ、話は教授の術として娛樂の術として決して新しいものではない、話は昔からある一種の藝術で

ある、現代に於てはすべての活動が分業的になつて行くために一般的な繼續的な有益な形式は兎角忘られ勝ちとなるのである、而して現代に於て高級な専門的な藝術や昔よりも慥かに進んで居る筈の教授法が淺薄で狹隘なる所以は實に茲に存するのである。

古代にあつては話は年少者に智識を傳ふる主要の方法となつてゐた、而して同時にそれは最も普通一般の娛樂であつた。話は種々の役に立つてゐた、宗教の眞理を宣傳するにも、法律習俗の訓令を與へるにも、すべて談話に依らざるを得なかつたのである。話はすべて書物の代理をしてゐたのである、而して話は如上の目的を達するために藝術的とならざるを得なかつたのである、然らざれば記憶して居なければならぬことを消し難き印象として止めて置くことは出来ないからである。種族の文化は斯くして羊皮紙の上にはなく、兒童の頭腦でふ鋭敏なる記録板の上に漸次記されて來

たのである。生きて居る記憶は印刷された頁よりもよく文化の精髓を保存して來た、何故ならばそれは言語ばかりでなく、意氣、氣分、感情、言外の微妙な意味、筆紙に現し難き表現等をも傳へて居るからである。

話の歴史を研究した人は誰でも話といふものは眞摯な目的を有するものなることを知つて居る、話は宗教の目的を離れて後も尙その眞面目を失はなかつたのである。吾人が話の中に世界を見る時はそれは全然宗教的態度である、而してあらゆる國土、あらゆる時代に於て古き話は尊敬せられて居る、——畏敬と神秘の魅力は常に時代の附いた物語に纏り絡んで居るものである。種族といふものは子供の如く好きな話の言葉をそのまゝに保存して置きたがるものである。何故ならば夫等の話は時に臆氣なりとはいへ——それが眞理を語るやうに思はれるために——深刻にして根本的であるからである。話の歴史はそれ自身生々した劇的の

場景に充ちてゐて、一種の魅するが如きローマン  
スである。而して至る所に信仰が眞摯を示して居  
る、若きアメリカ、インディアンの口を通して語  
らるゝ話、アフリカの森の下蔭に將又アイスラン  
トの木舎の爐邊に兒童は常に年長者の話に瞳を輝  
かして耳傾けるのである、更に東の方に眼を轉す

るならば其處には黄色の僧服着けたる僧侶達が椰  
子葉の書物を小脇に抱へつゝ、佛陀の誕生を説くで  
あらう、支那や日本には職業的の談話者なるもの  
があつて席亭や市場に立つて人々を樂ましめ又教  
へつゝあるのであり、吾人は又北部アフリカに於  
ても異様の眼を光らせたアラビヤ人の群れの中に  
職業的の談話者を發見するであらう。ヨーロッパ  
に於ける古蹟が暗黒時代を通じても尙忘られずに  
後世に傳へられたのはうらぶれの唄ひ女や談話者  
の力に俟つ所が多かつたのである。一言にして之  
を蔽へば宣傳すべき宗教、不滅ならしむべき傳統  
習慣、記録すべき歴史が存在したところ、又國民

思想、地方的傳説、道聽塗説の行はるゝ所にはす  
べて多かれ少かれ眞面目で熟練して居り、多かれ  
少かれ創造的藝術家である所の談話者が發見せら  
るのである、彼して彼等はすべて眞理として學  
んだことを他に傳へんとする眞面目な使命を帯び  
て居ることを自覺して居るのである。

世界には澤山の話がある、誰もそれをすべて知  
ることは出来ない、けれども話をする人は自分の  
目的に適ふ話を選ぶことが出来なければならぬ、  
世界にあるすべての話を一つの全體として眺めや  
うと努めた時それは談話者を益するであらう。何  
故吾人の間に話が存在するか、如何なる法則が話  
の發生を支配しつゝあるか、斯る問題を説き得た  
ときそれは談話者の助けとなるであらう。

話は誰に書かれたともなく何處にも存在する。  
而して彼等の多くは不朽である、話は人間の空想  
の産物であらうか、日常の經驗を夢幻裡に曲解し  
たものであらうか、それとも又或る目的のために

意識的に作り出されたものであらうか、否々話は空想の産物でもなく目的のために作られたものでもない。話は成長して來たのである。話は世界何處にも變りなき原理に關する想像に働きかけた深き人間の願望の表現であり結果である、世界のすべての話は一つの全體として見られなければならぬ、人間の心の正當な産物として見られなければならぬ。

話の起源を理解するには想像的に原始人の生活状態に內的に外的に侵入しなければならぬ、然る時彼はその頃の生活は、大掴みな物の言ひ方をすれば、宗教的の氣分に充ち満ちてゐたに違ひないといふことを知るであらう。この宗教的の氣分は單に受働的のものではなかつた。知らんとする熱心をして生々としてゐたのである、それは願望の態度であつた、斯くて話は生れ出でたのである。

實際話は空想であつた、併しそれは同時に空想以上のものであつたのである、それは片意地な世

界から間に合せの満足を得んとする努力である、話に於ては時に人にも征服せられる巨人といふものがある、それは更に大なる巨人の力に従つて死せる自然の如何ともしがたき法則を犯すのである、美しき妖精は自然の拒むことを許してくれるのである、話に於て人間は全然傍觀者の態度を執つて居るがその實彼等は皆、自身の願望、恐怖、失望等を語つて居るのである。故に話は未開人にとつて實際的のものである。

未開人が話を作るのは單なる好奇心や空想からではない、最も眞實なる要求——或る條件（この條件の無い時、彼等は缺乏及び恐怖に堪へない）の下に住はんとする要求からである。この時期に於て話は全然眞摯なる信仰である。

人間の根本的の願望は何處に於ても同じである、而して心的活動の法則も普遍的である、發達の同階段にあつて同様の生理的環象を與へられれば同様の心的産出が現れる筈である、是等の話が

單に空想であつたならば吾人は恐らく同じやうな命題を各地に見ることはない筈である。

神話も原始的の話と同じく大抵或る深刻な思想若しくは欲望の多少變形せられたる表現である、神話は啓示として人々に齎されたものではないが一種の宗教である、人々によつて人々の憧憬から作られた宗教である。

原始時代に於て話が作らるゝ時それは愉快な面白い話を得やうといふ意向によつてはなかつたらしい、技術には無頓着であつたが氣分は眞面目で有意義であつた、それは説服を事としてゐた、確信を齎すことを目的としてゐた、満足の感情に資すべきもの、リズムや生々した想像、結構の釣合——快美の感情を増加すべきすべてのものは自然話の中に現はさるゝのである。

話は信仰を現す、けれども信仰は文明人の間に於て變化する如く原始人の間にあつても變化する、斯くの話は半信仰的の産物となる、この半信

仰的の産物がお伽話である。

話の盛衰に關しては他にも原理がある、けれども以上に説いた原理は一般に話の起源を説明するものであると思ふ。話は人間の願望及び信仰に充たされて居る。而してこれがために話は子供に愛せられ又吾人に愛せられるのである。

文明が進んで國民の理想が起つて來ると話は是等の現す（多くの場合、想像的の）大英雄に係り始めるのである。これ即ち宗教的の話の人格化である、それは尙信仰を止めて居る、神は依然として舞臺に現れて來る、けれども興味を中心は人間の話である。叙事詩は多くの無關係の話を寄せ集めてその目的のために作り變へ、之に詩的統一と審美的形式とを與へたものである。叙事詩は談話本能の頂點である。

文明が進むに従つて信仰は信條及び儀典に於て截然決定せらるゝやうになり宗教生活は俗的生活からは明かに切り離されてしまふ、半信仰の範圍

は減少して子供の世界にのみ見らるゝに至るのである。吾人は尙古き動機に刺激せられ形式に於ける興味を以て意識的に文字を作るのである、吾人

は今日では倫理的、宗教的、審美的若しくは實際的の定つた目的を以て語を書くのである。(Partidge: Story-Telling in School and Home に據る)。

## 『ト プ シ イ』(一)

— 英文學に現はれたる子供(三十四) —

岡 田 み つ

(トプシイは米國の奴隷の生活状態を書きました有名の小説アングル・トムス・キャピンの中に出て来る黒奴の一少女であります。)

或日オフイリヤ(此家の主人の従姉いとこで家の取締りに來て居る婦人)が家内の雜用を爲てゐると、セント・クレア(主人の姓)が階子段の下から呼んで居るのが聞こえた。

「一寸降りて御いでなさい。見せる物がある。」  
オフヒリヤは、手に縫物を持つて降りて來ながら、

「何です」と言つた。

「奥向きになつて買つたものがあるんで……一寸御覽なさい。」とセント・クレアは言ひながら、八九歳の黒女兒を引き出した。その少女は極色の黒の性の黒奴で、その丸い光つた眼は、ガラス玉のやうにキラついて四邊の物をキョロ／＼見廻してゐた。座敷の立派さに驚いた爲めその口は半分開いて、白い光る齒が見えてゐた。その縮れた短髪はいくつかの三の組に編まれて、四方八方に突き